

9/11 メモリアル・ミュージアムと“記憶”の変容

教授 飯田 剛史
(社会学)

私は、「9/11同時多発テロ後のアメリカ戦争政策の解明—宗教社会学の視点から—」をテーマとする研究(真宗総合研究所一般研究)を2014年からはじめ、11月にニューヨークのナショナル9/11メモリアル・ミュージアムを訪れた。周知のように、2001年9月11日にテロで崩壊した世界貿易センター・ツインビルの区画は2011年より9/11メモリアル・パークとなっている。二つのビル跡地には約60メートル四方、深さ約10メートルの二つのプールが穿たれ、中心部にはさらに数メートル深い四角の窪地が設けられている。四方の壁から無音の滝が底面に流れ落ち、さらに中心部の窪地に流れ込む。四方の縁の胸壁には、2001年9/11テロ事件および1993年の同ビル爆破事件の犠牲者、2982名の名前が刻まれている。全体は黒い石材で覆われ静謐な雰囲気が醸し出されている。二つの跡地を含む200メートル四方の区画には、多くの苗木が植えられ将来は森になるという。この公園のなかに、2014年5月、メモリアル・ミュージアムが開館した。地上は3階だが地下深くまで展示スペースが広がっている。

9/11事件を記憶し、犠牲者を追悼するためにどのような公的施設を作り、どのような展示をするか、様々な議論がなされてきたが、ようやくその施設の全体像が目に見える形で示されることとなった。

なお隣接地の再開発計画も進んでおり、北側には、崩壊した貿易センタービルと同じ高さのフリーダム・タワー・ビルがすでに立ち上がっており、その他いくつかの超高層ビルの建設工事が進められている。

9/11テロ事件について多くの出版物が出ているが、事件の全般に関わる「公式」のも



のは、次の4点であろう。

1. A. Blais & L. Rasic 2011 “A Place of Remembrance : Official Book of September 11 Memorial” National Geographic Society
2. C. Chanin & A. M. Greenwald eds. 2013 “the stories they tell : artifacts from the national September 11 memorial museum: a journey of remembrance” Skira Rizzoli Publication. Inc
3. National Commission on Terrorist Attacks upon the United States 2011 “The 9/11 Commission Report : The Attack from Planning to Aftermath, Authorized Text” W. W. Norton & Company
4. S. Jacobson & E. Colon 2006 “The 9/11 Report : A Graphic Adaptation based on the Final Report of the National Commission on Terrorist Attacks Upon the United States” Hill & Wang

1. は、事件の資料写真やメモリアル公園建設の議論過程および公園施設の写真を提示している。

2. はミュージアムの公式ガイドブックで、9/11当日の時系列によるテロ事件の再現、崩壊建物の地下数階分の壁面、鉄材、破壊された消防車などの実物展示と写真資料、テロ実行犯の写真、消防士たちの活動、今後のテロとの戦いなどの提示からなっている。

3. は、9/11事件に関する国立委員会による公式報告書2004年初版に基づく増補版である。

4. は、公式報告書(3)初版に基づく漫画ダイジェスト版である。

ミュージアム内のショップでは、上記のほか多くの書物、記念品が販売されている。特に犠牲者たちの記事や写真を集めた書物、救出活動時に殉職した消防士たちについての書物も多く見られた。

このメモリアル・ミュージアムを見てどのように印象をまとめればよいか、かなり戸惑っているというのが正直なところである。これまで多くのニュースや写真、資料などを見てきたので情報として新しいもの、衝撃を受けるようなものはあまりなかったように感じた。いくつかの点ではかなり詳しい展示がなされていたが、良く分からないままの問題もいくつかあった。

テロ実行犯19名は事件後すぐに割り出され、一人一人の写真、経歴が展示されていたが、これは事前に彼らがアメリカの情報当局によってマークされ監視されていたことを示している。それならばなぜ当局はテロ実行を防止できなかったのかという疑問が残った。

事件はアメリカ政府によって、オサマ・ビン・ラディンを首謀者とするアル・カイダの組織的犯行であると断定されたが、ビン・ラディンが具体的にどのように関わったのか、実行犯までのつながり、アル・カイダの組織実態、という中間部分が不明あるいは不開示のままであるように思った。

また罪のない多くの人々の生命が突然のテロで奪われたことが強調される反面、アメリカの多国籍のビジネス活動そのものが中東地域の経済的・政治的抑圧と混乱の要因の一つであり、そのためにアメリカがテロ攻撃の標的となった可能性については全く触れられていない。



9/11メモリアル・パーク夜景

下：跡地プール、右：メモリアル・ミュージアム、
上：フリーダム・タワー

ミュージアムの最後のコーナーでは、ブッシュ大統領たち政権中枢がこの事件にどのように対処したかが示され、「テロとの戦い」に全力を尽くすという大統領のメッセージ映像が示される。

これは、テロ後のイラク戦争と「愛国者法」すなわち国民の通信情報の全面的監視・盗聴、不審者へのほぼ無制限の拘束、尋問を正当化するメッセージのように見えた。これに対して、アメリカの理念である基本的自由権への侵害であるという批判があがっている。しかしアメリカ市民の多数は、「テロとの戦い」であればやむを得ないとこの法を承認しているようにも見えた。

9/11メモリアル・ミュージアムのある地域は、ニューヨークのビジネス・金融の中心であり、今日活発なビジネス活動が再開されている。しかし人々の心には9/11テロ事件の記憶がさまざまな形でわだかまっているはずである。

9/11の“記憶”は未だ落着せず、今後も、人々の心の中の想いとメモリアル・ミュージアムとの相互作用のなかで、また中東情勢やテロ動向と連動して、さらに変容していくものと思われる。